

早川さんと反戦脱走米兵への支援

吉川 勇一

一九六七年の十一月一三日、ベトナム反戦の市民グループ、「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連、代表Ⅱ小田実）は、横須賀に入港したアメリカ空母の「イントレピッド」から四人の米反戦水兵が脱走し、それを援助していると発表した。これはマスコミの大報道となり、一般の市民からは広い支援・賛同が与えられた。のち、この四水兵は、ソ連を通じてフィンランド・ストックホルムに無事に送られた。

この発表以来、在日の米軍からは、反戦の脱走兵がつぎつぎと登場し、それらはストックホルムに送られたのだが、しかし、海に囲まれた日本からの脱出は非常に困難で、それまでのかなり期間、市民の家庭や山小屋、あるいは教会、病院などに匿われていた。日本語の出来ない米兵を一般の家庭に秘匿、安全に暮らさせておくということは、そう易しいことではなく、協力者を見つけることも楽ではなかった。

在日の米軍兵士は、日米安保条約によって日本の出入国の各法律に規定されることがなく、したがって日本からの国外脱出も違法ということではなかったのだが、しかし米軍からの脱走、あるいは

はAWOL（不許可離隊）は米軍法違反となり、米軍から通知されると、日本の警察は直ちにその米兵を捜査、身柄拘束し（つまり、事実上は逮捕）、米軍にひきわたす義務をもっている。事実、脱走米兵への捜査・逮捕は、日本警察の仕事であって、逮捕・米軍への引渡しは多数行なわれ、米軍の軍法廷では厳しい処罰（長期服役、不名誉除隊——市民権や運転免許、大学入学への利益などの剥奪等）を科されていた。また、日本の法律に違反していない日本人であっても、道路交通法違反、銃砲刀違反所持、軽犯罪違法などの理由で捜査や拘留されることがよくあった。したがって、脱走米兵と、それへの援助日本人は、まるで犯罪者のように、官憲の目から秘匿して暮らさざるを得なかったのだ。

早川さんの一家は、ベ平連からのこうした脱走米兵への保護依頼を即座に引き受けてくださった。最初に受け取った米兵が、マーク・アラン・シャピロ（一九四八年生、陸軍四級特技兵—伍長級待遇）だった。彼は一九六八年の三月の初めにベ平連に入ったが、いつも大きなスーツケースを抱えていた。シャピロは、テリー・ホイットモアや金鎮珠など他の五人の脱走兵とともに四月二二日に根室から日本を脱出、ソ連を経てストックホルムに送られた。

このシャピロについては、早川さんの子息、吉則さん（当時二四歳）の記憶がある。以下に吉則さんのメモ。

——原水協で父と一緒に仕事をしていて吉川勇一さんから父に米軍脱走兵を預かってほしいとの電話での依頼があり、タクシーで行くからということ、夜日吉本町の下の道に父と二人で歩いて迎えにいった。吉川勇一さんと若い外人が大きなトランクを持って車からおりてきた。これがシャピロだった。一八歳と言っていたと思う。家についてすこし話した。……下着を買いにデパートに行った。お金はシャピロにもらった。庭の物干にシャピロの大きな下着がぶら下がっていたが当時私も太っていたので不審には思われないだろうと思った。シャピロは約一週間ほど我が家にいたと思う。とにかくこれは無事すんだ。——

米脱走兵への援助活動については、『となりて脱走兵がいた時代』（関谷滋・坂元良江編、思想の科学社、一九九八年）など、かなり詳細な記録が出されており、シャピロについての記録もすべてあるのだが、しかし早川さんの一家のことはまったく書かれていない。当時、活動の記録は一切残さないことを決めており、編者たちは出来る限り当時の人びとのインタビューをまとめて記録にしたのだが、しかし必ずしも完全に埋められてはおらず、早川さん一家がシャピロを預かってきたことは、今度初めて明らかにされたのだ。当時、活動は人が個人から個人の口から口のみで行ない、記録やメモは残されていなかった。脱走兵援助活動は、こうして四〇年ほど後になって初めて明らかにされるようなことも多くあるのだ。早川さんに脱走兵援助の協力をお願いしたことは、私もよく覚えているが、しかし、それがシャピロであったという記憶はなくなっていた。

次に早川さん宅に預けられた「米兵」が大問題だったラッシュ・ジョンソン（仮名、一九四〇年生？、海軍二等兵曹？）だった。彼は脱走兵を装ってベ平連に入り込んだ米軍のスパイだったのだ。最近の情報では、アメリカのペンタゴン（国防総省）内に海軍犯罪調査局、NCISとかいうのがあって、その調査員だったという説があるという。ベ平連に入ったのは一九六八年十月初め、そして彼が

べ平連から北海道の弟子屈で姿を消すのが、十一月五日のことだったが、シャピロに続いて早川さんに渡されたのが、この人物だったわけだ。
以下に吉則さんのメモ。

——今度は自称早稲田の学生が二人でつれてきた。このうちの一人はもしかすると吉岡忍氏かも知れない。それがジョンソンだった。二七歳と聞いていたと思う。学生たちを交えてジョンソンと話をしたら社会学が好きだといっていたが、当時有名だった「孤独な群集」のリースマンは知らないとのことだった。……母が前のシャピロは不安そうにしていたが、今度のジョンソンは平然としているといっていた。腕にへたな黒豹の入れ墨がありシャピロと違いあまり知的には思えなかった。……私が大学の実験で遅くなった夜ジョンソンはどうしても散歩に行くのだといつて両親の止めるのも聞かず一人で散歩にでかけたそう。私が帰ってくると近所の地図を私に書いてみせた。地図はだいたい正確で、下田町のバス停にあるポリスボックスなども書いてあった。また約一週間位でジョンソンが移動する日が来た。早稲田の学生二人と確か吉川勇一さんもきたと思う。早稲田の学生はつけられているのではないかと心配していた。吉川勇一さんがさつさと歩くようにジョンソンに言っていた。ところがジョンソンは上の道にでる街灯の下で立ち止まり、靴のひもを直した。皆が立ち止まってはだめだといったが聞かなかつた。……多分二週間位して北海道でジョンソンが行く方不明になり、探しているうちに踏み込まれてメイヤーズらが捕まったという話を母から聞いた。要するにジョンソンは米軍の送り込んだスパイだったのだ。よくわからないがジョンソンは今日で言うところの衛星を使った携帯電話みたいなものを持っていて司令部と連絡をとっていたのかも

れない。おそらく何らかの通信手段はもっていたのであろう。ジョンソンによって我が家の脱走ルートはつぶされた。——

ジョンソンの行動については、前記の『となり』にも詳しいが、すでに最初から、この人物はおかしいのではないのかという話はべ平連の仲間内では強く出ていた。吉則さんが書かれているジョンソンの持つ「衛星を使った携帯電話みたいなもの」については、神戸大学教授だった故小嶋輝正さんも「なんかややこしい時計持ってたね、発信機じゃなかったんかな。付き添ってた人から尾行がついてると電話してきた」と言われていた(前書九七ページ)。

吉則さんが書かれているように、このスパイのジョンソンによって、脱走兵援助の地下組織の「ジャテック」(反戦脱走米兵援助日本技術委員会)の中心メンバーや早川さんご一家のような個人の宅などの多くが使えなくなり、運動はかなりの打撃を受けたのだった。

脱走兵への援助は、早川さんご一家の全員の協力であったが、しかし、一番大変だったのは美佐夫人だったはずだ。他の家族は、一日の大部分は大学や学校で留守になるわけで、後は美佐さんがお一人で脱走兵の世話を焼くわけで、それはかなりの苦労があったはずだ。だが、美佐さんは、本書の座談会の中で、「その頃はもう怖くなくなっていましたね、怖いことばっかりだったから」と笑っておられた。

問題は、ジョンソンはスパイではないかという推測がすでにあり、追放すべきだという意見が強く出ていたのに、運動は最後まで追放せずに匿い続けたことだった。

べ平連のリーダーの一人、鶴見俊輔さんは、「私はこの人を脱走兵として受け入れました。そのス

クリーニング（ふるい分け）は京都であった。やがて北海道で、もう一人の本物の脱走兵を捕まえる手引きをして、彼は姿を消しました。スクリーニングをまちがったことの責任は私にあつて、この運動に対して私がそれを負うています。この失敗は、脱走兵援助を思い出すたびにいつでも私のなかに兆します」と言っている（吉岡忍・鶴見俊輔『脱走の話——ベトナム戦争いま』SURE刊、二〇〇七年）。確かにこのスパイによる運動のマイナスは大きかった。しかし運動のメンバーは、ジョンソンを追放しなかったということは間違っていないかつたという意見が今では強く持っている。吉岡忍さんの文を紹介しておく。

——これは大人たちの判断ミスだ、という割り切れなさが残った。だが、このとき救われたのは私自身だった。

もし私があくまでスパイ説にこだわり、ジョンソンを放り出せと強硬に主張したら、次に何がはじまったのだろうか。あとになって私はそう考えるようになった。

きっかけは一九七二年の連合赤軍事件だった。……「革命的警戒心のなさ」を攻撃し合い、ついには殺し合いに突き進んでいった彼らの軌跡を知ったとき、背筋が寒くなった。……ほんのちよつと踏み間違えていたら、私自身もあなつていたかもしれない、と思つたからだ。

私の主張通りにジョンソンが放出されていたら、その後、たぶん私は増長していただろう。脱走兵を受け入れるたびに、こいつはスパイではないかと疑心暗鬼になり、かくまってくれる人たちを片っ端から疑うようになる。身近な仲間にも、おまえは真剣じゃない、と言ひ出したかもしれない。この不吉な気配はたちまち全体に広がっていく。

スパイという言葉にはそのくらい魔力がある。

それこそ組織の温存を第一に考え、活動の純粹さを求めていったとき、必ず起きることなのだ。……曖昧さやいい加減さを、きちんと意識的に残しておくこと。それゆえの失敗がありうることを覚悟しておくこと。まあ、しょうがないな、とお互いに苦笑しつつやり過ごすくらいの信頼感を培っておくこと。ひとつの活動でも、一人の生き方でも、こうしたことが大事なのだと私は学んだ。

私は脱走兵たちを支援したことを、いまも誇りに思っている。しかし、そこには私自身に関する苦い記憶もまわりついている。（吉岡忍『路上のおとぎ話』朝日新聞社刊、一九九八年、一八―一九ページ）

ベ平連のなかで、鶴見俊輔さんは、当事のジャテックの責任者だった栗原幸夫さんについて、こうのべている。「埴谷雄高との対談でそのことに触れて、あるときスパイであったとしても、われわれの仲間としては彼をつきださない、そういうふうに入れてよかつたと言つていた。というのは、埴谷も栗原も、戦前からの共産党体験があるわけ。それで仲間のことを、あれはスパイだ、あれはスパイだと言ひ出したら、その疑いの目がばーっと伝染するんです。ベ平連にとつて、それまでは全然なかつたような新しい状況がうまれる。それを戦前すでに彼らは知っているんだ。つまり、戦後の連合赤軍の前に知っているから、これがスパイだと思つても、仲間としては、それを放逐しない、そういうふうにした。それはよかつたと思つても、栗原は言つていゝ」（前掲書『脱走の話』五四ページ）。

この体験は、早川康式さんの思想、生き方ととても近いものだったと私は思っている。早川さんからは、戦前の「反帝同盟」の思ひ出について、本書では何度も述べられているが、スターリンの肅清や、また日本の「反帝同盟」自身のなかの仲間追放の苦い経験と、戦後の運動ではそれを強く

阻止しようとする生き方が書かれている。

スパイのジョンソンを自宅に匿われることをし、「我が家は……つぶされる」ことまでなったのだが、文句も批判も出されることがなく、早川さんのペ平連への支援はずっと続けられたのだった。